

第4回木曾川上流自然再生検討会

【第3回検討会からの主な意見と対応】

平成21年11月4日

中部地方整備局木曾川上流河川事務所

第3回検討会の主な指摘と対応

	主な指摘・意見	回答等	頁
河道の変遷と現状	年間総雨量の推移を示して欲しい。	木曾三川流域及び各河川の流域平均雨量を整理した。流域平均雨量はいずれも減少傾向が見られる。	P3
	流況の変化は、降水量の減少が原因か、新規利水の影響はないか。	今渡地点の流況変化を整理した。今渡地点の流況は、実績流量・自然流量で顕著な違いが見られないことから、新規利水による影響は少ないと考えられる。	P4
	代表的な年の流量の頻度分布を示して欲しい。	犬山、忠節、万石地点の日流量の頻度分布を整理した。各地点とも昭和30年代に比べ、近年は、平水流量(185日)～豊水流量(95日)の範囲において、流量値の変動幅が拡大しており、流量が減少している傾向にある。	P5
	将来的な河床の動向について、押さえておく必要がある。	木曾川の既往の河床高変化は、昭和40、50年代に大きく低下した。その後、平均河床は比較的安定したが、最深河床が低下しており、局所洗掘の進行が見られる。近年は、42.0k付近で大きく低下しており、出水時に洗掘が生じたと考えられる。河床の動向については、将来的にモニタリングしながら把握する。	P6

第3回検討会の主な指摘と対応

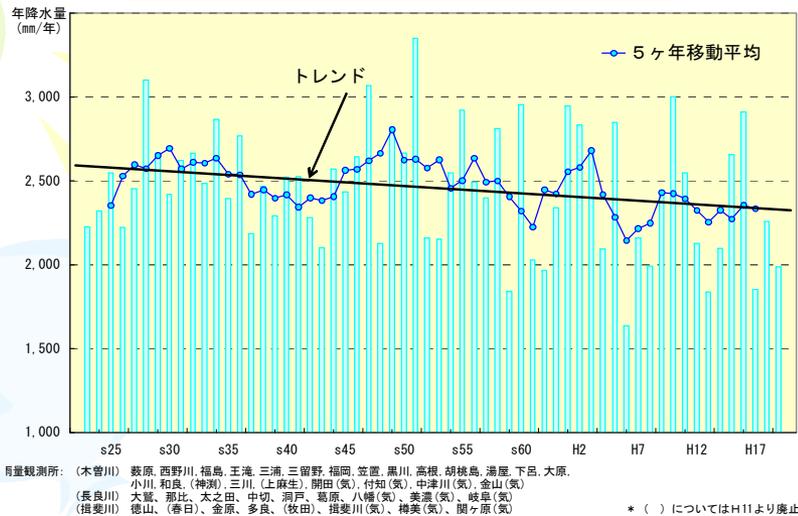
	主な指摘・意見	回答等	頁
トンボ池	少し掘って水面が出てくるのであれば、系外からの水の補給はいらないのではないか。	トンボ池等の水位は地下水位と連動している。今後、水位をモニタリングしながら、系外からの水の供給の必要性について検討していく。	P7
河道の変遷	昭和22年から昭和40年くらいまで、河道内の樹木が見られないが、河川内の草木は日常的に使われていただろうと想像される。	<p>地域住民からの聴き取りにより、主に以下の情報を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長良川は、最近5～6年で急激に変化している。草地化が最も顕著である。 ・燃料不足の時代には、河畔林は殆ど無く、あっても細い低木のみで、薪等への利用も不可能であった。 ・洪水時には、濁流の中を大小の丸太材が沢山流れていて、船頭達はその流木を命がけで拾い集めていた。流木は、沿岸住民の大切な生活物資として、カマドや風呂焚きの燃料に供された。 ・南派川の旧小網橋より上流部分は砂地であり、皆が小麦、サツマイモ、トウモロコシ等の畑として利用していた。 	P8
外来生物対策	外来生物も河川環境要素の一つであるから、自然再生計画と外来生物対策の関係について、整理することが必要。	外来生物対策をはじめ、事業の実施にあたっては、地域の方々及び関係機関の協力を得ながら進めていく。	P9

第2回検討会からの意見と対応について

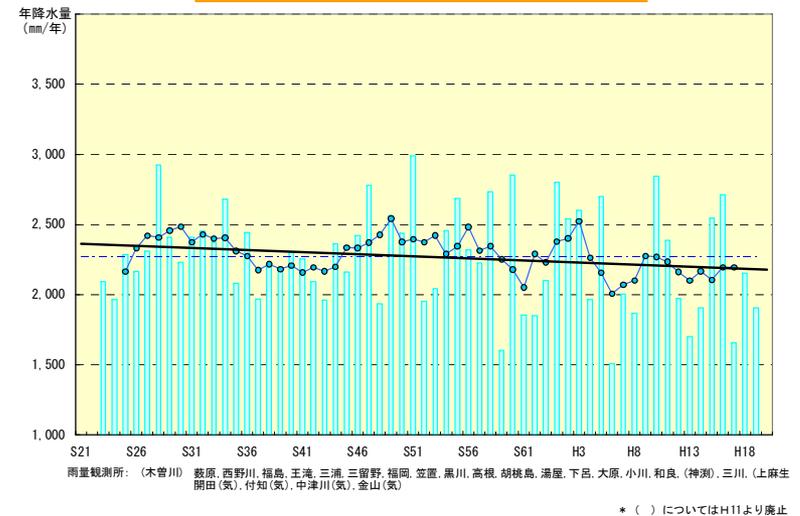
Q: 年間総雨量の推移を示して欲しい。

A: 木曾三川流域及び各河川の流域平均雨量を整理した。流域平均雨量はいずれも減少傾向が見られる。

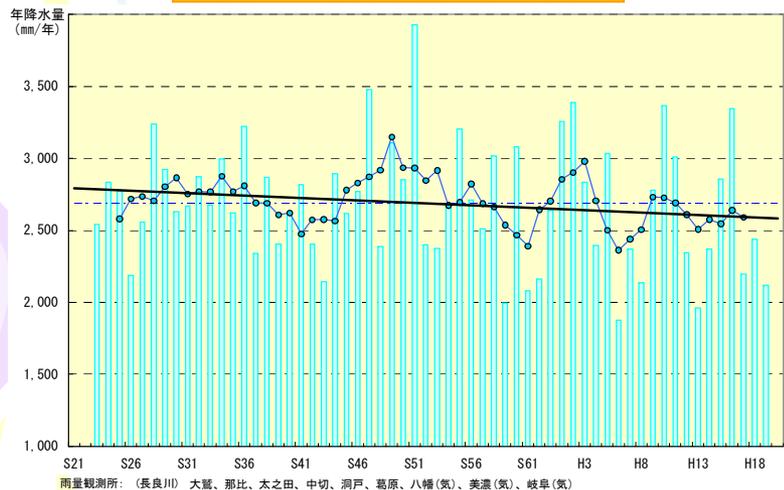
木曾川水系の年降水量の経年変化



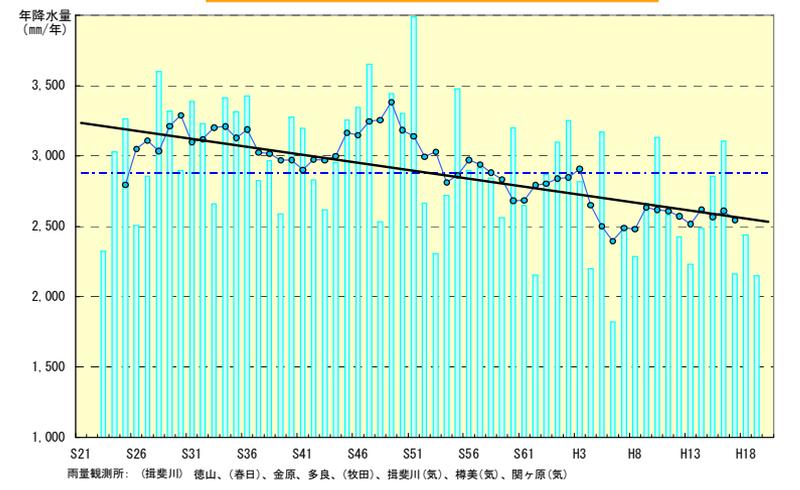
木曾川の年降水量の経年変化



長良川の年降水量の経年変化



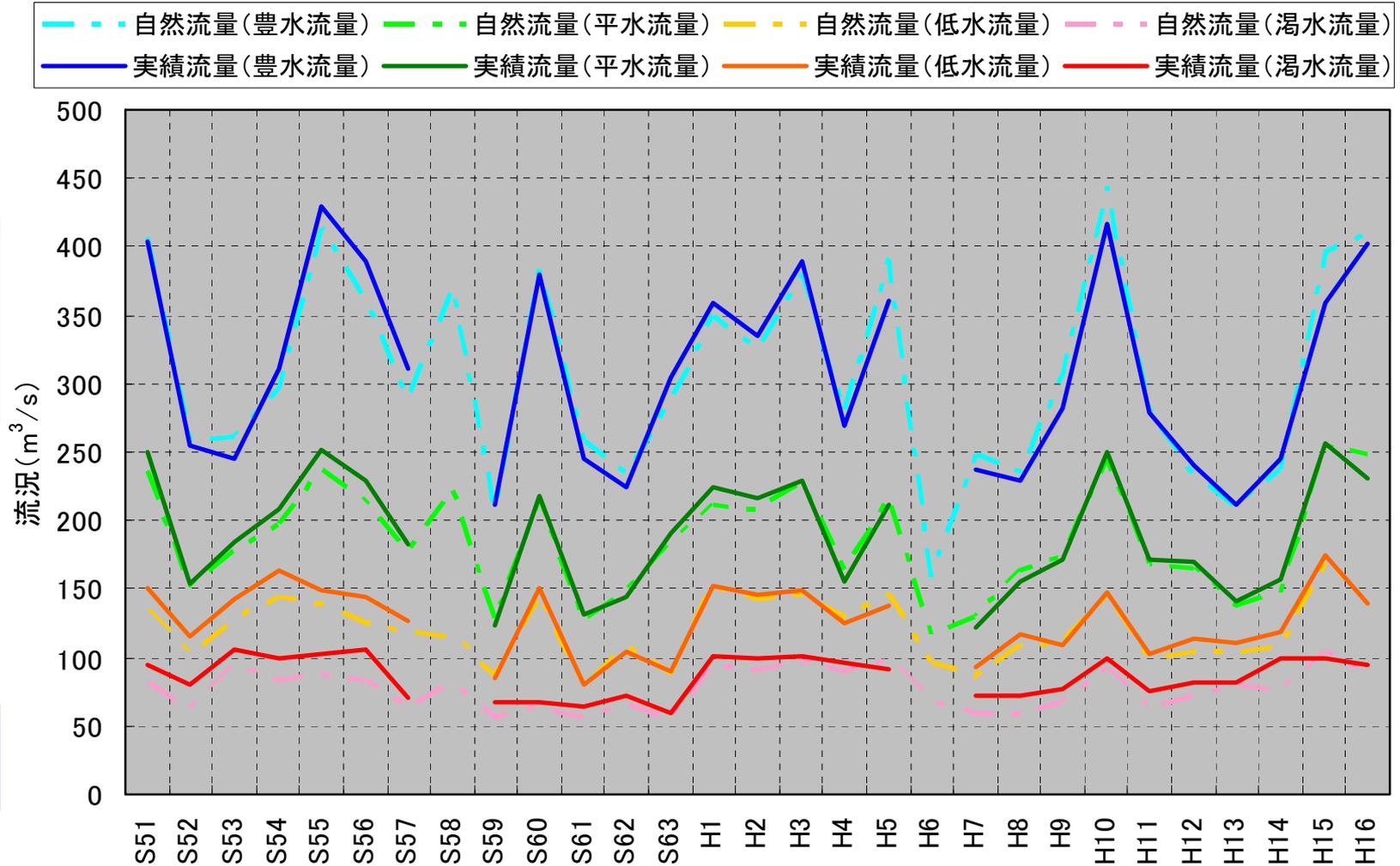
揖斐川の年降水量の経年変化



第2回検討会からの意見と対応について

Q: 流況の変化は、降水量の減少が原因か、新規利水の影響はないか。

A: 今渡地点の流況変化を整理した。今渡地点の流況は、実績流量・自然流量で顕著な違いが見られないことから、新規利水による影響は少ないと考えられる。



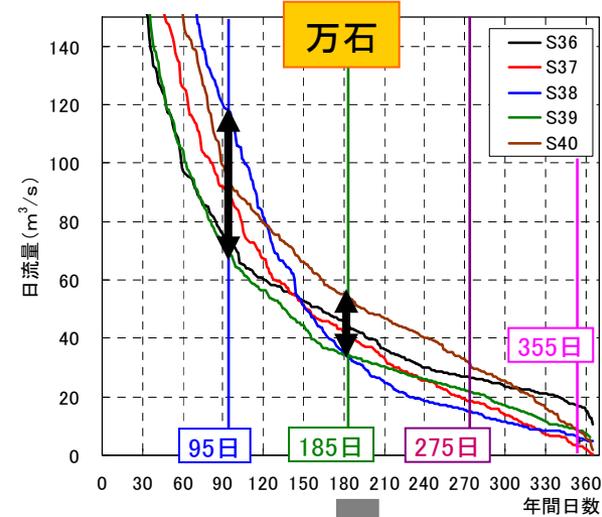
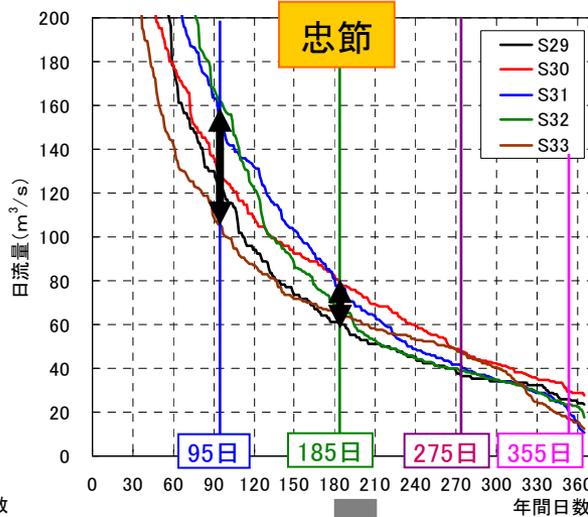
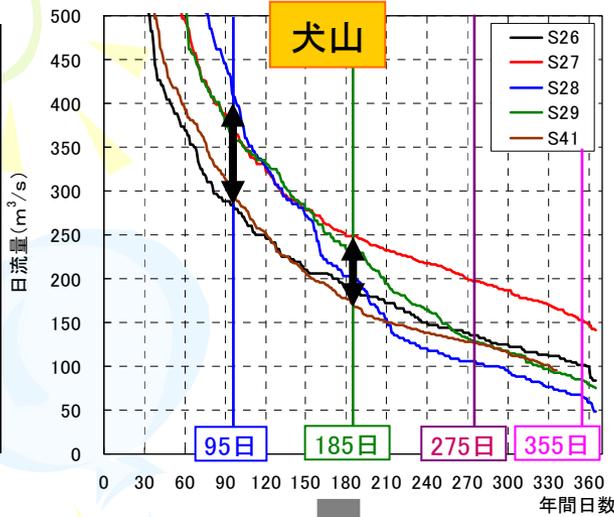
自然流量: ダム運用戻しデータ
 実績流量: 今渡地点の流況データ

第2回検討会からの意見と対応について

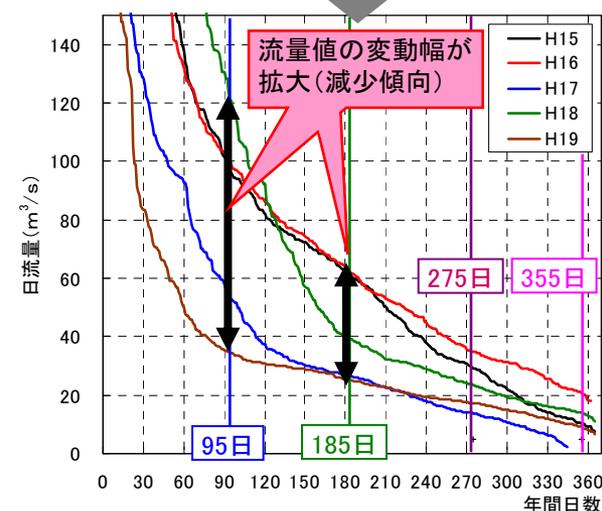
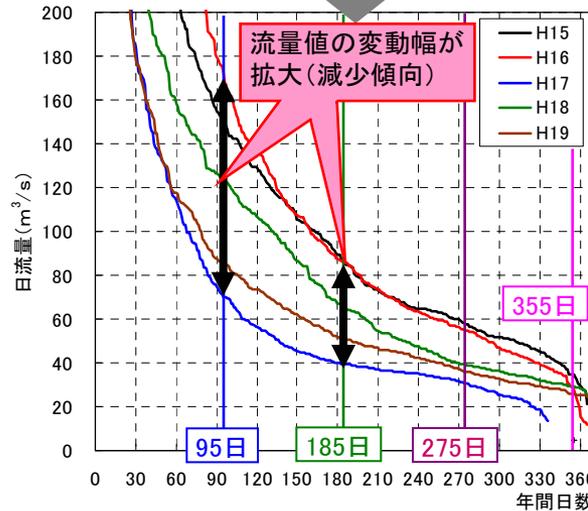
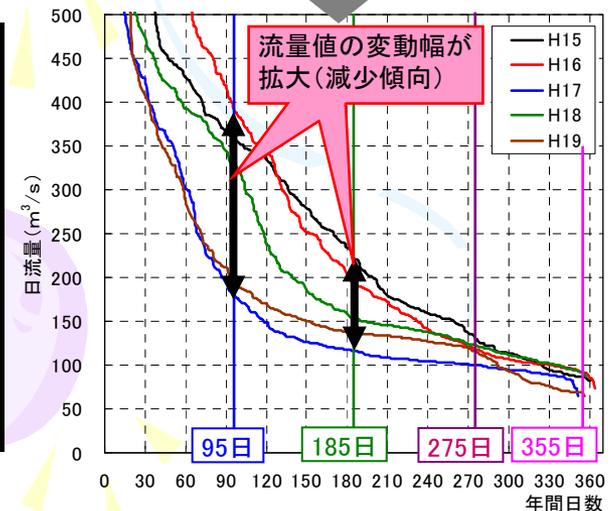
Q: 代表的な年の流量の頻度分布を示して欲しい。

A: 犬山、忠節、万石地点の日流量の頻度分布を整理した。各地点とも昭和30年代に比べ、近年は、平水流量(185日)～豊水流量(95日)の範囲において、流量値の変動幅が拡大しており、流量が減少している傾向にある。

昭和30年代



平成15～19年

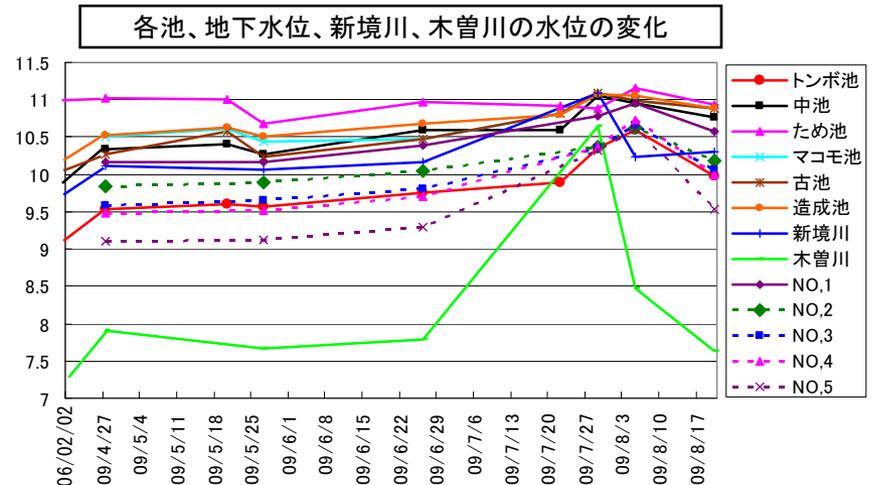
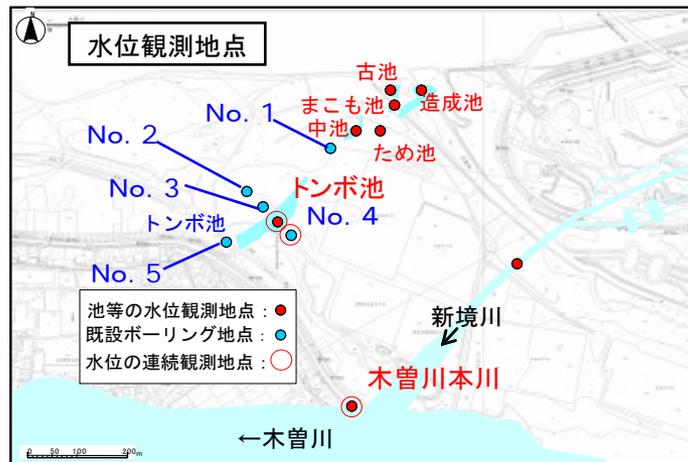
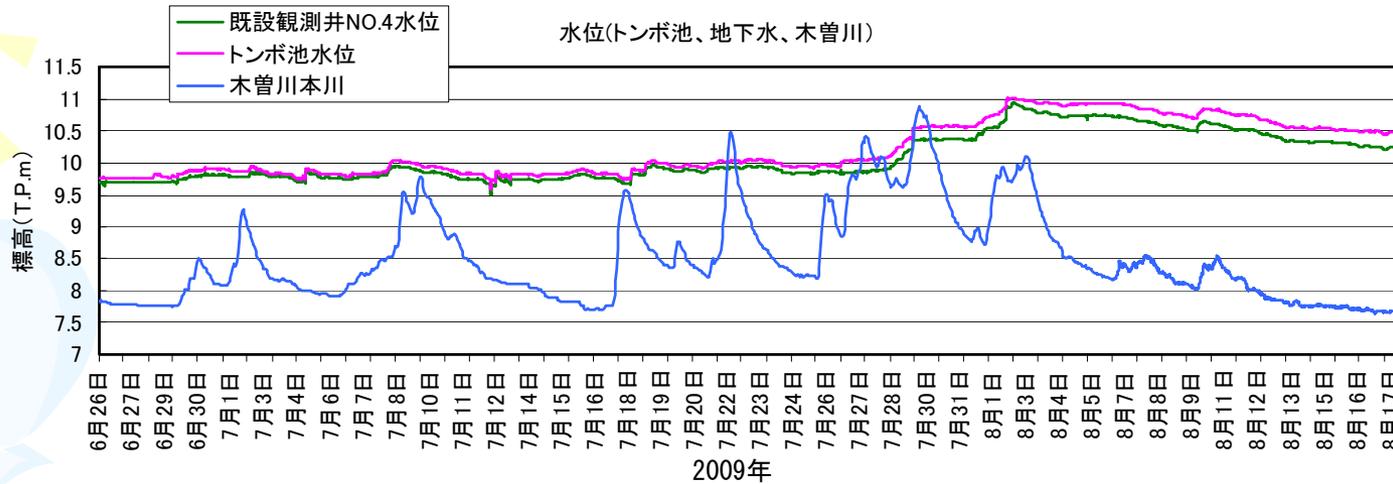


トンボ池等の湿地環境の再生、ワンド等の水際湿地の保全・再生について

Q: 少し掘って水面が出てくるのであれば、系外からの水の補給はいらないのではないか。

A: トンボ池等の水位は地下水水位と連動している。今後、水位をモニタリングしながら、系外からの水の供給の必要性について検討していく。

■ トンボ池と地下水の水位はほぼ同期しており、トンボ池の水位は地下水水位の変化に支配されていると考えられる



砂礫河原の再生について

Q: 昭和22年から昭和40年くらいまで、河道内の樹木が見られないが、河川内の草木は日常的に使われていたと想像される。

A: 地域住民からの聴き取りにより、主に以下の情報を得た。

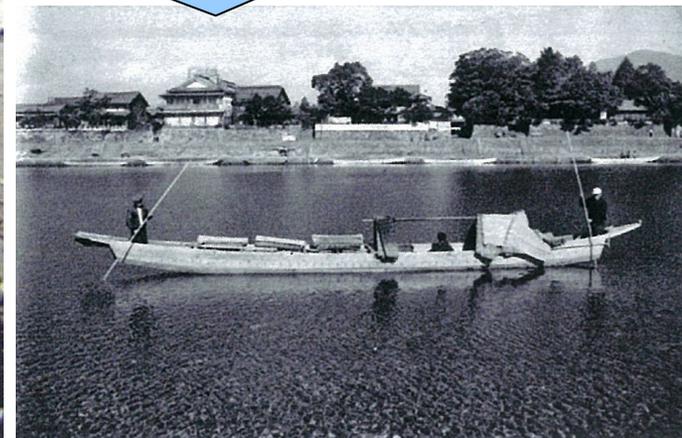
- ・長良川は、最近5～6年で急激に変化している。草地化が最も顕著である。
- ・燃料不足の時代には、河畔林は殆ど無く、あっても細い低木のみで、薪等への利用も不可能であった。
- ・洪水時には、濁流の中を大小の丸太材が沢山流れていて、船頭達はその流木を命がけで拾い集めていた。流木は、沿岸住民の大切な生活物資として、カマドや風呂焚きの燃料に供された。
- ・南派川の旧小網橋より上流部分は砂地であり、皆が小麦、サツマイモ、トウモロコシ等の畑として利用していた。



昭和35年8月 長良橋より上流を望む

かつては、川幅が現在より広く、多くの人々が水浴などに利用していた。水深も、「歩いて渡れたら一人前」と言われるほど深く、水浴場では、木のボートで巡視していたとのこと。

川の中が見えるほど、水がきれいで、川底には砂利がごろごろしていた。



昭和30年代の長良川

外来生物対策について

Q: 外来生物も河川環境要素の一つであるから、自然再生計画と外来生物対策の関係について、整理することが必要。

A: 外来生物対策をはじめ、事業の実施にあたっては地域の方々及び関係機関の協力を得ながら進めていく。

